

絵画であり、見本帖―「古錦」の小宇宙

アートの現場から

ACCAC通信

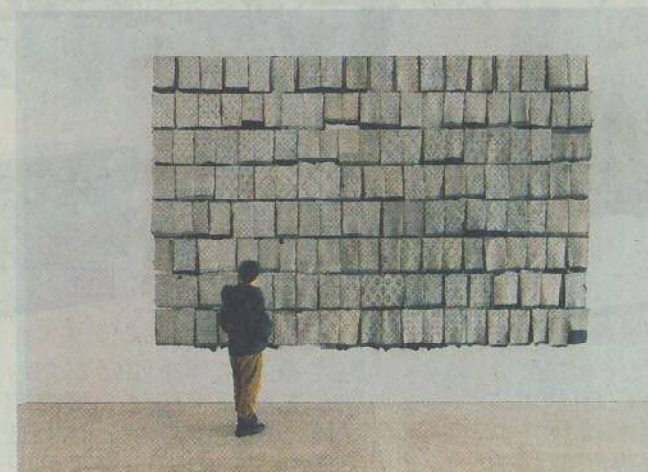
新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、残念ながら1月23日までで一般公開を終了しましたが、国際芸術センター青森(ACCAC)ではヴィジョン・オブ・ア

枚ずつ見るように：
今回、大川家で資料を拝見して印象的だったのは、コギンに関することでした。着物として着用できる状態のコギンは1点だけで、それ以外は模様のある身頃部分だけが保管されています。身頃は全部で108点ですが、そのうち約40点に柄を分類するタグが付けられていたようです。経年により現在は、身頃とタグが合致しているものは少ないのですが、地域で模様がどのように呼ばれていたか記録していたこと、分類されている模様には「くろ」（津軽弁で田の畦道）柄が多く含まれることが分かります。

オモリ特別編「大川亮コレクション」生命を打込む表現を開催しました。本展では、大川亮（1881〜1958年）の農閑期における副業品開発の基となった郷土の工芸品、特にオリゲラやコギンを中心とするコレクションを、彼がいかに見ていたのかということ意識しながら展示を作りました。

大川のコレクションの中には確かに「サヤ形」の身頃が1枚あり、試しにそれを中心に置いて模様の類似と発展を意識してみると、自然と「くろ」や「井桁」といった柄に展開し、端の部分はモドコのような基礎模様に戻っていきました。卍は様々な宗教で使われ、力や和の元という意味でも用いられます。

大川亮は、青森の工芸についていくつか文章を残していますが、ケラについては『工藝』30号（1933年、同年の「木村産研時報」第3号もほぼ同内容）に、コギンについては『郷土誌むつ』第1号（1933年）に詳しく書いています。この二つの文章は、おおよそ対になっており、農作業の合間に女性はコギンを刺し、男性はケラやハバキを



『郷土誌むつ』の大川のテキストは「古錦の話」という題名ですが、「錦」は種々の糸で文様を織り出したものの総称で、この独自の当て字は大川がコギンを刺し子から発展した、織物として捉えなかったことを表しているに違いない。 ※第1金曜日掲載。今回は都合により変更しました

古作コギン108点の展示風景（撮影：小山田邦哉）